

カトリック八尾教会ニュース



2022年7月 Tháng bảy

【今月の予定】

ミサの時間

日	内容	時間	内容
1日(金)	福者ペテロ岐部司祭と187殉教者	9:00	①グループ(A地区+ベトナム1)
3日(日)	年間第14主日	10:30	小教区評議会
10日(日)	年間第15主日	9:00	②グループ(B地区+ベトナム2)
16日(土)	初聖体勉強会	11:00	③グループ(C地区+ベトナム3)
17日(日)	年間第16主日	14:00	八尾教会
	ベトナム語のミサ	11:00	①グループ(A地区+ベトナム1)
24日(日)	年間第17主日	15:00	③グループ(C地区+ベトナム3)
	祖父母と高齢者のための世界祈願日	9:00	②グループ(B地区+ベトナム2)
31日(日)	年間第18主日	11:00	子どもとともにささげるミサ
		10:00	

■からし種 『堅信の秘跡』

堅信の秘跡は、「入信の秘跡」の1つです。入信の秘跡は、洗礼、堅信、聖体の3つの秘跡を指しています。...

旧約時代の預言者たちは、救い主であるメシアが来られる時には、メシアの上に主の霊がとどまると預言をしていました。この預言は、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた時に、実現しました。イエスがヨルダン川で洗礼を受けた時、天が開け、聖霊がハトのような姿で、イエスに降りました。救い主としての使命を父なる神から受け、子としてイエスは聖霊との完全な交わりのなかで、生涯をかけて、イエスはその使命をまっとうされました。

聖霊がイエスに充満したということは、ただイエスだけにとどまらず、救い主メシアであるイエスに属する私たち、すべての神の民にも与えられるものです。キリストは、まず、復活の日に聖霊の約束をしてくださいましたが、特に、聖霊降臨の日に目に見える形でそれが実現されました。使徒たちは、聖霊を注いでくださったキリストの意向にそって、洗礼の恵みを完成するものとして、按手によって、聖霊のたまものを授けました。この聖霊のたまものを与える按手が、堅信の秘跡の起源です。聖霊のたまものを授けることを、もっとよく表すために、初代教会から香油の塗油が儀式の中で行われるようになりました。この塗油は、「キリスト者」という言葉が、「油を注がれた者」という意味をもっていることと深いかわりがあります。「キリスト」という言葉は、ヘブライ語で「メシア(救い主)」という語のギリシア語です。この意味は「油を注がれた者」という意味です。ですから、洗礼を受け、堅信の秘跡を受けることによって、信者はさらにキリストにしっかりと結ばれていくのです。



(女子パウロ会H.Pより)

『祈りましょう』

チェ ジュヨン しんぶ
崔 周永 神父

司祭や修道者、神様のために自分の全てを捧げようとする人々が少なくなっている。全世界的な現状で、司祭や修道者への志願者がまだ多いと言われる大陸は数少なくなっている。ヨーロッパは勿論、日本は言うまでもない。単純に考えてみると、日本のカトリック信徒の割合は人口の 0.343%で、44万に達していない。つまり、人材のプールが少ない。となると、司祭や修道者を目指す人が少ないのは当たり前になる。自然な結果とのことだ。私の出身教区、韓国の大邱大司教区、その信徒数 49 万人、司祭 512 名。韓国は人口の 10% がカトリック信徒だ。しかし、今、韓国も司祭や修道者への志願者が減りつつある。金持ちになればなるほど司祭や修道者の道を目指す人々が少なくなるのが一般的傾向と言われている。召命の観点から見ると、ヨーロッパは悲惨な状況に陥り、日本もそれと変わってない。ここで浮かんでくる一つの疑問。司祭や修道者という生き方、それ自体が選択肢にもなってないことは何故だろう？この文章を読んでいる皆さんの内、真摯に我が子こそ司祭や修道者になってくれたらと思っただことはあるのか、と先ず聞いてみたい。司祭や修道者は、我が子ではなく、遠くの国からやって来る宣教師であって、一度も、そして夢にも我が子がそんな道走ることを想像もしなかったとすれば、どう言ったらいいだろう。

説教を通して、こう語ったことを思い出す。「多くの人々は、司祭が出てくる出口ばかり気にしているし、司祭になるための入口にはほぼ興味を持ってない」と言い放ったことがあった。日頃からの考えで、司祭は天から降りてくる何者ではなく、この教会共同体の中で生まれて来る信徒の一人なのだ。つまり、その共同体という畑の実りなのだ。ローマ留学中、日本はどうなのと聞いてくるアフリカ人の司祭に、私はこう答えた。È tomba di missionari (宣教師達の墓なのよ)、と。

2008 年だったと思うが、当時私は、宮大工の仕事をしていて、韓国の山岳地帯のある小都市でお寺を立てていた。小さなお寺だったが、ほとけさまを納めるお寺の中心になる建物、木造の建物はかなりの労力が要るものだった。大梁が二つで、それを運ぶ時に、縄に結んだ棒を6人の宮大工が肩で担いだ。どの位の重さだっただろう。恐らく 1 トンは優に超えていただろう。一人当たり 160 キロずつ支えていたわけになる。当時、私の体重 57 キロ。独りでは到底無理な担ぎに耐えたのは、6 人のうちの一人だったからだろう。つまり、チームで協力し合い、力を出し合ったから出来たのだ。比丘尼、つまり、女のお坊さんがそのお寺を担当していたが、あのお坊さんは、私たちが、でかい、重たい大梁を運んでいる様子を見て泣いていたことを思い出す。何故、あのお坊さんは泣いたのだろう。求道と言われる自分の道だけでなく、必死で生きていく人々は他にもあるのだと感じたからかもしれない。

人間は、いつ、祈るのだろう。自分だけの力では乗り越えられない危機にあった時ではないかな。背筋を最大限緊張させ、必死で大梁の重量に潰れないように体を一つの棒のようにしていた、あのお寺での、宮大工だった時が、もしかして、今よりもっと熱心に祈っていたかもしれない。何故なら、先が見えなかったからだ。

先が見えない、司祭や修道者が激減していく時世、祈りましょう。それも本気で、必死で！